第６回　東京芸術文化評議会　議事要旨

１　日　時　平成２１年６月１０日（水曜日）午後４時から午後５時半まで

２　場　所　東京都庁第一本庁舎７階　大会議室

３　出席者　石原都知事、猪瀬副知事

鳥海評議員、野村評議員、福原評議員、三宅評議員、森評議員、山本評議員

逢坂専門委員、太下専門委員、片山専門委員、草加専門委員、長田専門委員、

西巻専門委員、馬淵専門委員

４　次　第

（１）会長等の選出

（２）東京文化発信プロジェクトについて

（３）評議会の検討課題について

（４）意見交換等

５　発言要旨

○廣瀬文化振興部長

ただいまより第６回東京芸術文化評議会を開催いたします。評議員の皆様方には、ご多忙中、引き続き今後２年間の再任ということでお引き受けいただきまして、まことにありがとうございます。会長選任までの間、私が進行役を務めさせていただきます。

なお、お手元の名簿にもございますとおり、新たに評議員に平田オリザさんがご就任されましたので、ご報告いたします。また、専門委員の方々も再任にご承諾いただけました。まことにありがとうございます。

本評議会は原則公開でございますので、あらかじめご了承いただきたいと思います。

それでは、会長選出をお願いしたいと存じます。会長は評議員のうちから互選するということになっておりますので、よろしくお願いいたします。

○森評議員

会長は引き続き福原さんにお願いしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

○廣瀬文化振興部長

ただいま森評議員から引き続き福原評議員にというお話がございましたが、いかがでございましょうか。

（拍　　手）

○廣瀬文化振興部長

それでは、福原評議員が会長に選出されました。福原会長、どうぞよろしくお願いいたします。

○福原会長

それでは、僭越でございますけれども、引き続き会長を務めさせていただきます。

規定によりますと、会長に事故がある場合に職務を代理する会長代理を、会長があらかじめ指名することになっておりますので、引き続き鳥海評議員にお願いしたいと存じますが、いかがでございましょうか。

（拍　　手）

○福原会長

ご同意をいただきましたので、鳥海評議員が会長代理でございます。よろしくお願いします。

それでは、早速、次第に沿って会議を進めたいと存じます。まず、東京文化発信プロジェクトの報告です。本評議会の提案に基づきまして、昨年度から東京ならではの芸術文化の創造・発信と芸術文化を通じた子どもたちの育成を目的として、東京文化発信プロジェクトが実施されております。初年度に行われましたフェスティバル系事業と子どもたちのための事業の中から幾つかを取り上げて、主催者から説明をお願いします。その後、評議員の方からコメントをいただきたいと存じます。

恵比寿映像祭、フェスティバル/トーキョー、六本木アートナイト、キッズ伝統芸能体験の４つを取り上げてご説明いたします。

ではまず、恵比寿映像祭から説明をお願いします。

○今村副館長

東京都写真美術館副館長の今村と申します。よろしくお願いいたします。

恵比寿映像祭は、２月２０日（金）から３月１日（日）まで、東京都写真美術館の全フロアで開催いたしました。やや天候に恵まれなかったのですが、１０日間の会期中に２万７,０００人を超えるお客様にご来場いただきました。今回は「オルタナティヴ・ヴィジョンズ」という総合テーマを設けました。展示、上映、トークセッション、そしてライブイベント、オフサイトの展示などを総合的に行い、国内外の約１００名の作家の皆様から約１７０点に及ぶ多彩な作品を紹介させていただきました。その中には日本での展示が初めて本格的なものとなるジャネット・カーディフ、そしてジョージ・ビュレス・ミラー、ま

た約１０年ぶりに回顧特集を組んだジェネラル・アイディアなど、ほかではなかなか見ることのできないアーティストの作品もお目にかけることができました。

一方、恵比寿映像祭では、ウェブサイトを活用した広報宣伝にも力を入れてきました。その結果、ウェブサイトへのアクセス件数は約４か月の間に４０万件に達し、そして、企業・団体のウェブサイトを対象とする第７回東京インタラクティヴ・アド・アワードのインテグレーテッドキャンペーン部門で銅賞を受賞するという栄誉に輝きました。またさらに、アメリカに設立されました、すぐれたウェブサイトに贈られるWebby賞にもノミネートされております。恵比寿映像祭のウェブサイトは、会期終了後も継続的に運営されており、映像祭をきっかけとした映像界でのネットワークのつながりをサポートしております。

第１回の成果を踏まえ、リアル、バーチャル両面における写真美術館の存在感を高めていき、映像文化の発展に貢献してまいりたいと考えております。

〇福原会長

それでは、フェスティバル/トーキョーについて、お願いします。

〇蓮池事務局長

実行委員会事務局長、蓮池と申します。

フェスティバル/トーキョーは東京の新しい舞台芸術の祭典として、２月２６日から３月２９日までの約１か月間にわたり開催されました。東京芸術劇場を中心に、あうるすぽっと、にしすがも創造舎という池袋地域の３館を会場とし、約６万１,０００人以上の来場者を集めました。

プレオープニングとして、元フランス文化大臣ジャック・ラング氏を招いて国際シンポジウムを開催し、東京芸術劇場中ホールに満席のお客様をお迎えいたしました。

今回のフェスティバル/トーキョーは、世界の最先端の作品や日本を代表する演出家の作品など１９演目が上演される、過去にない規模の国際的な演劇祭となりました。さいたまゴールド・シアターの「９５kgと９７kgのあいだ」や、女子高校生１８人が出演する「転校生」など、プロフェッショナルな俳優でない人々を起用した作品が多いことが特徴でした。また、国際的なコラボレーション作品も多く、韓国のイ・ユンテク氏演出による「オセロー」や、平田オリザ氏がフランス、イランの演出家とともに取り組んだ「ユートピア？」などが発表されました。

フェスティバルの期間中、池袋の西口公園には人々の交流の場Ｆ/Ｔステーションが開設されました。週末にはこのステーションに「おやじカフェ」が出現、公募で集まった素人

のダンサーたちがパフォーマンスを披露しました。開催中には、まちなかにバナーや懸垂幕が掲出され、池袋はフェスティバル/トーキョー一色に染まりました。

次回のフェスティバル/トーキョーは本年秋、１０月２３日より１２月２１日まで、春同様、池袋を中心に開催予定でございます。

○福原会長

それでは、六本木アートナイトにつきまして、実行委員会の武村事務局長にお願いいたします。

○武村事務局長

ご紹介にあずかりました森ビルの武村と申します。六本木アートナイトは、去る３月２８日から２９日にかけて開催いたしました。開催場所は、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館、サントリー美術館、また六本木地区周辺の一部公共スペースや協力施設です。広域で行われる３つのテーマプログラムを含めた合計２８のプログラムが展開され、２日間で５５万人もの人々が来場、まちを挙げてのアートイベントとなりました。

テーマプログラムの１つであり、六本木ヒルズアリーナを中心に行われましたヤノベケンジさんの「ジャイアント・トらやんの大冒険」は、火を噴いたり、踊ったり、歌ったりのパフォーマンスで観客の目を釘づけにしました。

２８日夕方のオープニングアクトにあわせて、アートナイトのロゴをあしらった飛行船も上空を旋回し、開催に花を添えておりました。その後、翌朝５時まで、非常に寒い夜にもかかわらず、多くの観客にとどまっていただき、様々なプログラムを楽しんでいただきました。

同じくテーマプログラムの１つであります平野治朗さんの「《ＧＩＮＧＡ》@六本木」では、８００名もの参加者がＬＥＤを中に仕込んだ光る風船を手に国立新美術館から六本木ヒルズ、東京ミッドタウンをパレードしました。夜の六本木に光の川を生み出し、幻想的に、まちの姿を変貌させました。

もう１つのテーマプログラム、アートキューブは、日比野克彦さんのディレクションにより、１４名ものアーティストが２メートル四方のコンテナにアート作品を設置しました。また、新美術館の３つのアートキューブとともに、全体で１７個の作品により、六本木のまち全体が美術館となりました。

国立新美術館とサントリー美術館では、開館時間を延長するとともに、ライブパフォーマンスやトークショー、スライドレクチャーなど特別な催しを行いました。六本木ヒルズ

では、屋外を中心にして様々な大型のインスタレーションの設置や、屋内でのレクチャー、クラブイベント等を展開し、夜通しのにぎわいを演出しました。東京ミッドタウンでも、深夜から早朝にかけまして落語やアート、音楽を複合したライブイベントを実施しました。

六本木商店街では、この時期にあわせて高速道路高架下のライトアップのお披露目やデザイナーズフラッグの展示などを実施しました。１９もの地元の文化施設やギャラリーがプロジェクトに参加しました。飲食店を中心に６２もの店舗が営業時間の延長やスペシャルサービスを実施しました。また、終夜シャトルバスを運行しました。このことによって観客に安心感を与え、イベントの成功に大きく寄与したと思います。

事後に行いましたアンケート調査では、８９％の満足度、それから８６％の再来場の意向というお客様の強い反応が確認されております。

〇福原会長

後でまた皆さんのコメントをいただくわけですが、最後にキッズ伝統芸能体験について、お願いします。

〇大和部長

キッズ伝統芸能体験を担当いたしました社団法人日本芸能実演家団体協議会芸能文化振興部長の大和と申します。

昨年度のキッズ伝統芸能体験は、８月１日の国立能楽堂での開講式から始まりました。その後、８月から３月にかけて１８回のおけいこを経て、３月にはリハーサルと発表会が開かれました。公募により選ばれた２７７人の子どもたちが参加いたしております。この事業は、伝統芸能の世界に触れることを通じて子どもたちの豊かな感性を育て、日本文化への理解を深めることを目的としています。

体験の対象となったのは能楽、日本舞踊、箏曲の３分野です。子どもたちは都内１０カ所のけいこ場で、分野ごとに一流の実演家から直接の指導を受けながらけいこを重ね、リハーサル、本番を迎えました。

３月には、能楽は文京区の宝生能楽堂及び東京芸術劇場大ホール、日本舞踊と箏曲は国立劇場小劇場で発表会を開催しました。子どもたちは緊張しながらも８か月間のけいこの成果を立派に発表いたしました。発表会ではプロの実演家による公演も行われ、子どもたちは熱心に見入っていました。参加者や保護者からは、日本の古来の文化のすばらしさを改めて感じた、もっと多くの人に体験してもらいたいと一様に好評をいただきました。

○福原会長

評議員の皆さんからコメントをいただくのですが、恵比寿映像祭について、私から簡単にコメントをさせていただきます。

これは第１回目でありまして、これから将来的につなげるものであり、映像文化を介して地域へ還元することと、未来の創造活動へ貢献しようということを考えています。恵比寿の地域資源を生かした事業として、ガーデンプレイスや地元企業のご協力をいただきました。さらに渋谷駅の大型ビジョンで作品を上映して、映像祭をまちにも展開しました。約１００名のアーティストの作品が各国から出品され、開催期間はわずか１週間ほどでしたが、終了後もウェブサイトは継続的に運営しておりますので、今後、国内外の映像をリンクして、ここで発信をすることになると思います。

先ほどご説明しましたように、ウェブサイトを強化して、観客との相互交流に重点を置きましたので、これをきっかけに美術館がネットワーク化します。来館者も増え、ネットで来館する方も増えるという相乗効果をねらえるのではないかと考えております。

それでは、フェスティバル/トーキョー、六本木アートナイト、キッズ伝統芸能等についてお話をいただくわけですが、まずは野村先生に、キッズ伝統芸能体験についてお願いします。

○野村評議員

キッズ伝統芸能体験のお世話をし、組織の会長もしているものですから、いささか自画自賛するところがあるかもしれませんが、どうぞお許しをいただきたく思います。

このたびのキッズ伝統芸能体験は、都が支えてくださる資金をはじめ、関係団体の組織や体制を含めたご協力があればこそ実現できた事業だったと思っております。まずもって厚く御礼を申し上げます。子どもたちが稽古を通して、技術の習得のみにとどまることなく、総合的に日本文化を学ぶ機会になったことと、伝統芸能に対する潜在的な関心の高さと申しますか、それが明らかになったことを大変意義深く感じております。その背景には、質の高い内容とか、低廉な参加費とか、主催関係団体の社会的な信頼度などというものが大きく影響したのではないかと思っております。

これからは、子どもたちを通じて芽生えた興味や関心が、引き続き保護者をはじめとする周辺へも影響を及ぼし、鑑賞の目を育てる事業も含めた中長期的な施策をぜひお考えをいただけたらと思います。そのためには、毎回申し上げておりますが、日常的に伝統文化に触れる場所や環境の確保ということに、ぜひご留意をいただきたいと思います。

〇福原会長

提案者と総監督の両方を担っていただき、大変ありがとうございました。

六本木アートナイトについて、三宅先生、森先生からご感想をお願いできますか。

〇三宅評議員

我々２１_２１デザインサイトは、実は傍観していたという形です。

〇森評議員

でも、普段より遅くまで開館いただきました。今年だけでなく、来年以降もつなげたいと思っておりますので、またご協力をお願いします。

六本木アートナイトは、もともとアートが美術館の中にとどまらないで地域へ広がっていく、みんなで体験的に楽しもう、それが第１の目的であったこと。それからもう１つは、六本木に美術館、その他アート施設、文化施設が集積してきたので、何か一緒にみんなでやりたいという働きかけ、声かけをお互いにしながらも、それぞれの活動が忙しくて、実現できなかった。それを、今回一緒にやれる、良いきっかけになった。それが美術館のみならず、六本木の商店街の人たちも含めて一緒に参加できたことは、大変意義のあることだったと思っております。

桜が満開の時期、３月の最終土曜、日曜に開催しましたので大変賑わいまして、私も明け方まで中をあっちへ行ったり、こっちへ行ったりいたしましたけれども、みんながとても楽しそうに、夜通し楽しんでいたというのがアートナイトでございます。

アンケートをいくつか紹介させていただくと、「地域全体が美術館のようで楽しかった」、「毎年やってベネチア・ビエンナーレみたいな世界的なイベントになってほしい」、「来場者も大変多くて、熱気に包まれていて驚きました」、「国籍問わず、子どもから大人まで身近にアートが感じられるイベントで本当に楽しかったです」、「たくさんのすてきな展示があったが、たった１日しか見られないということがこのイベントの価値を高めていたと思います」というようなコメントをいただいております。

来年以降も続けていきたいと考えておりますが、パブリシティをもう少し早く出して、さらに広げられると、より良いと思っています。

また、パリのニュイ・ブランシュも地下鉄の路線に沿っていろいろなアベニューができています。夜通し交通機関を動かして、その地点をつないだアートイベントにしていくという意味からも、都バスとか都営地下鉄を終夜動かしていただくと、もっと広域的に楽しめるのではないかと思っています。

自分たちも大変楽しかったし、大成功だったと思っております。

○福原会長

期間が一晩だけということで、恵比寿映像祭でも、わずかな期間でもったいないという話がありました。本来イベントというのは、毎晩やるものではなく、集中して盛り上げるには、十分な事前の予告が必要なんですね。今回は予告についての体制が整っていなかったのと、あまりに短期間であったというようなことがありましたので、今後は早くからパブリシティを打つことが必要ということを一同反省しています。

○猪瀬副知事

テレビなどは絡まなかったのですか。

○森評議員

主催とか後援としては絡まなかったのですけれども、１月から何回か二弾、三弾、直前とパブリシティを出しておりましたので、それを受けてテレビにも出ましたし、前々日から新聞にも随分出ました。

○猪瀬副知事

民放のＢＳは割と時間が余っていると思うのですが、活用したのですね。

○森評議員

活用しました。

○猪瀬副知事

一晩じゅう中継してもいいですね。民放のＢＳや、ＮＨＫのＥＴＶみたいなものとか。

○逢坂専門委員

ラジオがずっとフォローしてくれていました。

○猪瀬副知事

それならいいですね。

○福原会長

この際、東京メトロポリタンテレビ（ＭＸ）に、もう少しお願いできれば良いですね。

○猪瀬副知事

ＭＸは、夜は通販ばかりなので、時間はあると思います。

○三宅評議員

もう少し早くから話をいただけば、我々２１_２１デザインサイトでも、何か表現を入れるなどの対応ができると思います。

○森評議員

また是非ご一緒に。

○猪瀬副知事

東京都のホームページではアピールしましたか。

○事務局

しております。

○三宅評議員

オリンピックがあれだけ人を集めて大変な盛り上がりなのですから、文化もやりようによってはいろいろできると思います。文化というと何となく高級な感じですが、小学生や中学生が夜中に起きているのは困るけれど、彼らや、地域の参加があると、もっと広がるので良いと思います。

○福原会長

フェスティバル/トーキョーにつきまして、蜷川評議員と、新しく評議員に加わりました平田オリザさんからコメントをいただいておりますので、事務局から説明をさせてください。

○事務局

それでは、ご紹介させていただきます。まず、蜷川評議員のコメントでございますが、電話でお寄せいただいたものですので、口頭にてお伝えいたします。主に次の５つの点についてお話がございました。

１点目といたしまして、評議会での提言から実施までの準備期間が短く、試行錯誤もある中、あれだけのものを集められたことについて努力を買う。フェスティバル/トーキョーは全体として大胆な構想を持ったフェスティバルを志向していたので、今後の方向性としてはとことんやってほしい。

２点目でございますが、全体が地味な印象となっているので、発想を小ぢんまりさせず、フェスティバルとしての社会的な発信力、喚起力、宣伝力をもっと強化・重視すべきである。

３点目に、作品を選ぶに当たっては、ヨーロッパの前衛のみにとらわれず、世界のダイナミズムな潮流に視野を向けるべきである。

４点目、展開場所についても、池袋が拠点としてあってもよいが、野外での開催など場を広げる試みが、さらに行われたほうがよい。

最後に、演劇作品が数多くある中に埋没しないように、広告物についても、もっと大胆なものをつくるべきである。

蜷川評議員のコメントは以上でございます。

続きまして、平田評議員からのメッセージをご紹介させていただきます。お手元の資料も、ご参照ください。評議員就任に当たり、都の文化施策全般についてのメッセージを頂戴しておりますが、まずフェスティバル/トーキョーについてのコメントをご紹介いたします。

フェスティバル/トーキョーは、若い有能なディレクターによって国際競争力を持ったプログラムが実現し、ヨーロッパ演劇界の多くのプロデューサーたちが注目する演劇祭になった。国際基準の演劇祭が初めて日本に誕生したことは喜ばしい限りで、今後も国際感覚を持った若手の登用を積極的に行ってほしい、とのことでございます。

次に、都の文化施策についてのメッセージですが、大きく２つご紹介いたします。

まず、文化施策全般についてでございますが、芸術文化の発展もスポーツと同様、トップの引き上げと裾野の拡大の２点に尽きることから、１点目、国際競争力を持ったアーティストに対する育成と手厚い支援、２点目、まちづくり、コミュニティ再生のための文化、芸術の活用、３点目、子どもを中心とした教育普及活動、若手の人材育成、新人の発掘の３点をきちんと階層化し、まちづくりについては区市町村との連携を図る一方、東京都の直轄の事業はできる限りトップと裾野を広げる事業に特化、集約していくべきではないかとのことでございます。

２つ目は主に演劇についての施策でございますが、東京都立の劇団やダンスカンパニーがないのはおかしいと思うが、最初から本格的でなくても、例えば東京芸術劇場附属の研修施設を置き、研修生の劇団が創作した児童劇などによって子どもたちに生の舞台に触れる機会を提供するとともに、演劇教育の現場を担える人材育成をあわせて行うことをお願いしたい、とのことです。

〇福原会長

４つの代表的な事業について紹介し、コメントもいただいたのですが、それ以外も含めた全般について、皆さんのご意見はございますでしょうか。

〇石原知事

この間、東京藝大の新しい学長以下、担当の美術、音楽、彫刻の先生方とお会いました。トーキョーワンダーサイトが非常に充実してきまして、東京にある幾つかの美術大学、武

蔵美とか多摩美の先生たちも、優秀な学生にはぜひ応募しろと言ってくれているようです。このようなことも聞き及んでいて、藝大が東京の芸術文化にいろいろな形で協力したいということでした。藝大が協力すれば、多摩美、武蔵美も乗り出してくると思います。そういうエネルギーをどのように東京都全体が活用して、芸術の様々な分野の展開をすべきか、皆さんにアイディアがあったらそれを述べていただき、できることは東京もお力添えして実践していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○福原会長

ありがとうございます。ぜひ、こちらからも提案ができるようにお願いいたします。

○山本評議員

先月、インドネシアのバリ島で極めて元気なイベントを開催してまいりました。良いお土産話になるかと思っておりますので、少しお時間を頂戴いたします。

いろいろな資源を大事にするという催しをやりました。２つの目的を持っておりまして、１つはインドネシアと日本の国交５０周年記念です。それから、１時間のインドネシア全域へのテレビ番組に仕立てて、シンガポールまで電波が流れます。ということは、アジア圏のオリンピックの票を持った人たちもごらんになる可能性があり、オリンピックの招致ということの２つの目的で開催いたしました。

これが本番前、観客約３,０００名が入っていくシーンです。特にオーストラリア系の方々が目立ちました。全部無料でございます。

これが、観客が入る前の昼間の最終のリハーサル場所です。ごらんのように岩場ですから、全く周りには火が燃え移らないということで、廃材を最大限に駆使した過去にない火のお祭りをいたしました。

福田前首相がいらっしゃいます。日本インドネシア協会の会長という立場で参加いただきました。

これはショーの一部です。虎の顔と、左側は竜の顔でございます。インドネシアでは、あなたたちはどっち側かと聞きましたら、マレーの虎という言葉があるので、僕たちは虎であると。当然、中国及び日本は竜ということで、この２つをイメージしながらショーを進行した次第です。

これは、現地で父親がインドネシアの人、母親が日本の人というような子どもたちに特別参加を頼んだシーンです。

これが、特にエコとの絡みで、東京を緑にしようというお考えがあるということを重々

承知しておりましたので、本物の緑の衣装ということで、その場で切ったバナナの葉を体に巻きつけ、踊っています。衣装費はほとんどかかりませんでした。

これが終盤ですが、一番上に星空のように紙風船が飛んでおります。約１,０００個近い紙風船が夜空に流れていきました。火は、ご覧の画面左側の通り、燃えあがっています。

これは現地の新聞の翌日版ですが、第１面にこのように掲載されました。

私はＴＯＫＹＯ●２０１６サポーターズクラブの会長ということもありまして、何とかこのイベントでお金を集めねばならないという立場でございました。今まで９０年代にロシア、ベトナム、インドと各２億円ずつ集めては文化交流をやってまいりましたが、今回は、いろいろなところから応援をいただきましたので、一番安値、後ほど具体的には報告いたしますが、そのお値段で完成しております。

何度も申し上げますが、インドネシア全土に１時間の番組になって流れました。番組が成立するためには番組を買ってくれるというスポンサーが必要ですが、それを本サポーターズクラブ副会長の大塚太郎君が引き受けてくれました。インドネシアでポカリスエットを売っているということもございまして、その番組を丸ごと支援していただきました。

これは、現地の日本語新聞に出ているショーの様子です。

これは、出発前に朝日新聞に出しました意見広告です。

ポイントに入りますが、現地のカメラが約１０台入りました。それから、日本から約５台のすぐれたカメラを持ってまいりました。最終的に、極めて練度の高い映像を持ち帰ることができました。８月末から９月の初旬に、招致委員会の方々から、最後のとどめを効かすような大イベントをやってくれないかというご希望がございますので、持ち帰りました映像を活用して、３つの案を持っております。（図示する）

まだ招致委員の方にお目にかけていない映像ですが、東京都のビルの下半分に映像が映るという企画でございます。それから、これは、原宿の第一体育館に、斜めの屋根にも映像が映るＰＧという手法を用いたものです。さらにこれは、絵画館の建物に映像を映し、ＰＧを使い、そして気球を飛ばす。こうしたイベントができるということで、既に予算を獲得して、あとはやるのみというところまでまいりました。

ということで、相当気合を入れてやってまいりましたので、後半の追い込みにお役に立てればと思う次第です。

○福原会長

バリ島の次はどこをお考えですか。

○山本評議員

東京とニューヨークと比較してみたのですが、緑がいっぱいあるという点では、ニューヨークだと思います。文化芸術の面でも、やはりニューヨーク。まだまだ東京は劣っているというのが私の考えです。

文化芸術の面をもっと庶民の生活に近づけていくべきであると思います。ニューヨークの博物館等も財政の面では厳しい思いをしています。入り口に恐竜があるアメリカ自然史博物館は、６時に閉館になりましたら、入り口でカクテルを飲みながら軽いディスコのようなことのできる催しを行い、収入を得ています。いろいろな活動をしながら、彼らも工夫しているということです。

また、日本で頑張るということはもちろん重要ですけれど、私たちがやや反省するのは、三宅一生さんや我々をはじめとして、日本発ではなく、ヨーロッパやアメリカ発の凱旋型でデビューしているということです。残念ながら、いまでも日本のデザイナーが日本で活動しても、海外からバイヤーが来るということはございません。一生さんも私もこれを打破すべく頑張りましたが、当面は厳しく、しばらくは国内に向かっても国外に向かっても積極的に、日本人の優秀さや情熱みたいなものをアピールしていくべきだと思っています。

○福原会長

寛斎さんのイベントは、東京でやるのですね。

○山本評議員

今年の８月末か、９月初旬。まだ日にちは決まっておりません。今日は評議員の方に相談せず、都知事にお会いできるので、先に発表してしまいましたが、どうぞお叱りがないようにお願いします。

○三宅評議員

我々も２１_２１デザインサイトを東京ミッドタウンでやっていますが、これは日本発です。東京発でも良いのですが、こちらから海外へ発信しています。３年目に入りましたが、世界中から申し込みが多いです。

我々の持っている力というのは、個々の活動をディレクターたちが集約、あるいは様々なテーマを与えることです。今「骨」展をやっていますが、パリの今一番おもしろいギャラリーから、持って行きたいとの申し出があります。ポンピドーセンターからも、そういった話が来ています。

日本人だけを使うわけではなく、努めて若い才能も含めています。様々な古典的な、例

えばからくり人形を含めて新しい表現にしようと考えています。現代はエンジニアリングだといわれているので、とにかく楽しくて、参加型で、結局どこの視点も持っている。寛斎さんは海外の人をはじめ非常に高く評価されていますが、自分たちが何を持っているのかをよく理解して、それを表現しているからすごいと思い、先程から見ていました。そのように時代が変わってきたのではないかという気がします。

ただ、１つ気になるのは、日本人は考え方が非常にコンプレインといいますか、不平不満を言う。海外へ行ったときには、悪くてもということはないけれど、エールを送ってくれる。それによって気づいていくところがあると思います。そういった態度が違うというところが異なると思います。我々日本人の見方はどこか健康じゃない。

オリンピックでは、体の細い選手が世界新記録を出したりする。あれは尋常でない努力の結果で、外国の選手に比べたら数倍の努力をしていて、大変なことをやっているんです。もっと国や都がスポーツを支援するチャンスをつくるべきだと思います。盲目のピアニストが３歳のときから弾き始めたように。それから太田選手のような、日本人のフェンシング選手が出てくるなんて思わなかった。彼らは個人的な力以上に頭脳の力も非常にすぐれているのではないでしょうか。そういう意味でも、このオリンピックというチャンスにぜひ実施すべきです。今からスタートしておくということは、日本人が健康になり、体も丈夫になる。長生き、だけでなく長く健康に生きることが大事と思います。そういうこともこの機会に考えてみたらどうかと感じます。フェスティバルは素晴らしいけども、まずは体力づくり、健康づくり、精神づくりを、こういうチャンスに生かせたら良い。廃校などをもっともっと活用し、意欲的にそのような場にしていただけたらいいと思います。

日本の青年たちを見ていると、男性も女性もですが、本当に薄っぺらな体をして、まるで妖怪のような感じがします。それを変えていくチャンスだと思います。オリンピック招致するということは、何があるよ、これがあるよではなく、日本人そのものが評価されることになればいいと思います。石原知事も非常に努力していらっしゃるのが伝わってきますので、我々も見習わなきゃいけないと思いながら、いつも話を聞いています。どのような形にすべきか分からないですが、寛斎さんのような人がたくさん出てくるとおもしろいと思います。

〇石原知事

日本では、体育というのは教育のカテゴリーに入っています。スポーツの専門家やアスリートを育てる施設が非常に欠けているんです。

皆さん、何か参考になると思いますけれども、国が遅ればせながら北区につくったナショナルトレーニングセンターを、１回ごらんになったらいいと思います。全くアートに関係ないようですが、例えば何百畳ぐらいもある広い柔道場や、水の中でも音楽が聞けるシンクロナイズドスイミングのためのプールなど、いろいろなものがあります。カヌーやボートは長いコースがないと漕げませんから、プールの水を逆に流して、その流れに負けずに漕ぐような施設もあったりします。私は、関西にも１つつくってやりたいなと思いますが、これは国の問題です。皆さんのような方々がごらんになると、カテゴリーが違うようで何かヒントを得られると思います。いつでもご案内しますので、１回センターをごらんになったら良いと思います。これは国営のものですけども。

それから、国際フォーラムの鳥海さんに頼んで、まちの真ん中で棒高跳びをやったり、１００メートルのトラックを走らせたり、三段跳びをやらせたりしました。まちの真ん中のビルが林立する中での棒高跳びの、その迫力というのはまたちょっと違って、ビルを越すわけにいかないけど、とにかくビルの谷間で人間があれだけ飛び上がるというのは本当にドラマチックで、非常に不思議というか、劇的なんです。そういうことも都はやっていまして、またご紹介しますから、ぜひごらんになっていただきたい。私は、入賞者がドーピングで失格となり、繰り上げて銅メダリストになった、前のアテネではゴールドメダリストになった室伏君の、あの人のハンマー投げを丸の内でやってやりたいんですよ。これは際どい話だけど、ものすごいパフォーマンスになると思って、下手な芝居よりももっとドラマチックでね。そういうことを皆さん考えてください。

ついでに、この間、藝大の学長と話したけど、一時期、丸の内は２パターンの牛（模型）を、現代美術をやっている若い人達にペインティングさせて並べましたよね。ああいうイベントもいいんじゃないかと思う。

それから、この間も学長に言ったんですが、人を選んでワンダーサイトでやろうと思っているんです。つくばエクスプレスという、秋葉原からつくばまでの、新しい路線がある。その周りは日本で一番広い関東平野ですが、ほとんど手つかずなんです。田中角栄みたいな天才がいたら何か国家プロジェクトを考えると思うけど、今の日本にはその余力がない。役人も発想がないし、政治家も小さくなっちゃったので。その沿線の駅が各駅停車で幾つかありますが、全部何にもないです。だから、無料でいいから、かわるがわる若い人に描かせてやろうと思うんです。ああいうことの運営も、評議会がサポートしてくださるとオーソライズされるので、そんなことを考えている。

それから六本木へ行く途中のトンネルに、壁画を描かせたんです。少なくとも若者たちがフラストレーションで変なスプレーを使って落書きをやるより、あのほうがいいので、あちこちで応用してやっていったらいいんじゃないか。そういうスペースがあちこちに展開しています。

千寿院というビクタースタジオの近くにあるお寺は、お墓の下にトンネルをつくったんですが、あそこにも描いた絵があります。うまいのも下手なのもある。ああいうこともあちこちでやったらいいと思うんです。少なくとも落書きより楽しいし、さすがにあれにスプレーをかけるやつもいない。

東京にはいろんなスペースがありますから、それを違う目的で使うと、まさに丸の内のアスリートの三段跳びとか棒高跳びのように、不思議に迫力があるものでね。速いランナーが、電車に遅れそうで慌てて走るのと違って、ランナーがとんでもなく速い速度で走ると、くたびれたサラリーマン連中も、同じ人間でもこういうことができるんだというアイデンティティを感じて、リフレッシュになると思う。そんなこともいろいろできると思うので、ぜひ皆さんお知恵を出してください。

○福原会長

ここで知事は退出されます。

（石原知事退席）

○福原会長

それでは、皆さんにコメントをいろいろいただいたのですが、評議会は、いよいよ２期目になります。これから何を実行していくかということもございますので、評議会が検討していく今後の課題について意見交換を行いたいと存じます。お手元の資料に沿って今村参与から説明をいただきます。

○今村参与

今、福原さんからお話がありましたように、今後の芸術文化評議会における検討をどの様に進めればよいか、専門委員の方々や福原さんと、いろいろお話をさせていただきました。これから資料２をご説明したいと思います。

第１期目では、約２年間にわたって様々な検討を行ってまいりました。東京の文化政策としての総合政策の展開の可能性や、東京型アーツカウンシルの検討。これはグランドデザインとして東京の文化政策をどうすべきか、ということですが、それと同時に集中的に世界の文化都市東京、それはオリンピックの文化プログラムを立候補ファイルに書くとい

う作業で、東京のクリエイターの方々、アーティストの方々にインタビューに行ってアイディアを頂いたり、三宅一生さんもおっしゃるような、東京のポテンシャルをどうやって引き出せばいいかということを、伝統芸能からデザインまで幅広くお話を伺ってきました。ややもすると芸術文化評議会の活動というのはオリンピックのためにやっているんじゃないかというような批判もありましたが、我々が足で稼いで様々な方の意見を聞いていったことで、いろいろなことが見えてきました。評議員の皆さんは、公共の力ではなくて、ご自身の力で自分の世界を切り開いていかれた方々だと思います。ただ、これから公共がどのような基盤をつくっていかなければいけないかということが、オリンピックを考えることによって見えてきたことがあったのではないかと思っています。

それと同時に、支援のあり方をどうするべきか検討し、いろいろな先駆的な取組も既に始まっています。都の予算でいえば、２,０００万円の助成予算だったものが８,０００万円になり、かつ公共に今までなかった先払いの制度というか、小規模な団体やアーティストたちが何かをやろうといったときにシードマネーを渡せるなどの、行政として画期的なシステムを提案してきています。

大きな資源である都立文化施設についても、部会の中で、例えば今後の都美術館の改修や、芸術劇場、東京都庭園美術館の見直しとか、どうやって積極的に資源として、地域のネットワークのハブとして、あるいは地域を超えた、アジアや世界のネットワークのハブとして活用できるのかというのを検討して、それを実施プランに移すという検討を繰り広げてきました。実施の中では時間がなくて、ご指摘もあったように広報が追いついていなかった点などもあったかと思います。しかし東京が一歩踏み出したという意味では、大きなステップだったのではないかと思っています。

今後の検討に向けて、評議員の方々、専門委員の方々から、東京から発信する上でのポイントとなるようなキーワードをぜひ共有したいと思っています。ペーパーの真ん中に挙げていますが、それは一例なので、これからの協議、検討の中でキーワードを皆さんと共有できればいいと思っています。

その１つとして、今回の文化発信プロジェクトを実施して見えてきたのは、クリエイティブシティというのがトレンディーな言葉として出てきたということです。東京は、ある一つのクリエイティブなものを持つだけではなく、大きなメガロポリスとして、独特な地域性を持ったまちが東京中にあります。先ほど森評議員からもお話がありましたが、アートナイトを実施したことで、地域自体が美術館のような機能になってくる。これはそこに

暮らす市民にとって、例えば美術館などが一事業としてやっているのではなく、まちそのものがもっとおもしろくなる。これが公共のやるべき事業なのではないかと思います。特にアートナイトは、国、都、そして区、地域住民、全部が重なり合ってできた事業ですので、大きな方向性が見えてきているのではないかと思います。

第１期での事業は、東京における多様な地域の文化拠点づくり、あるいは地域づくりとも言えることをやってきたのではないかと思います。目指すべき方向性としては、地域力、東京の潜在力、ポテンシャルをどういうふうに活用するか、または引き出すか、違うセクターの人たち――これまでは民間や区、都、国などが一緒にコラボレーションすることが難しかった。どのようなパートナーシップでコラボレーションができるか。単なるコラボレーションではなく、世代を超えて若者などとどうやってコラボレーションができるかです。単に支援をするだけではなく、若い才能を応援し、逆に、その人たちに任せていろいろなことができるのではないかと思います。それは３番にあるような、次世代への投資という教育的な観点を超えて、そのような可能性があると考えます。そのあたりがこの２年間の検討と文化発信プロジェクトから見えてきたのではないかと思います。

そして、もう１つ、ここで整理をしていかなければいけないと思った点は、東京の文化都市の形成に当たって、東京というものが首都東京であるということと、世界都市東京という様々なレイヤーの存在があります。地域住民を持つ東京としての顔、日本の文化活動を担っている人たちの大半が東京に住んでいること。東京と地方や地域との関係における意味からの東京。そして、ソウルあるいは上海、北京、シンガポール、台北、様々なところがアジアのネットワークハブの拠点となろうということで活動を広げています。今、香港では大規模な文化拠点整備が行われていますが、その中で東京は何ができるのか、何に寄与していけるのかというようなことも明快にしていきたいと思います。

同時に、アジアを超えたもっと大きなグローバル社会の中の一員として、東京が何に寄与できるのかという視点も欠かせないのではないかと思っております。その右になりますが、２期の検討課題の中に幾つか大きな項目があります。大きな項目が重要ということだけではなく、これから検討していく幾つもの課題があると思います。それを具体的な事業に落とし込みながら、その事業を展開することによって見えてくることというのがあると思います。前回の評議会でもお話があったように、第２期では、ぜひパイロットプログラムのようなものを展開して、以前から提言があるような総合政策としての文化政策が展開できないかと思います。今までは、芸術文化というのはバレエ、オペラ、絵画、彫刻とい

う、かなり昔からの歴史的な様式というふうに捉えられがちでした。今は、例えばデザインとパフォーマンスとか、地域のコミュニティをベースにしたアートプロジェクトなど既に領域横断的な活動が始まっていて、芸術文化が担っているものが１９世紀的な、いわゆるサロン的な芸術というものよりもっと広い文化というものを担っているものへ変わってきていると思います。

例えば文化活動と環境、文化活動と教育、文化活動と福祉、あるいは防災、様々なテーマが文化というものを切り口にネットワーク化が可能となり、そのような文化によって都市政策のネットワーキングの横ぐしみたいなことが可能になると考えます。そういうことも検討できるのではと思い、検討の課題と項目を幾つか書いてあります。

先ほど申し上げましたパイロットプログラムですが、昨年のオリンピック立候補ファイルにおいて、東京の文化プログラムの中に「千の結び」と表現したプロジェクトがございます。英語では"Tokyo Thousand Knots Project"という表記で書かれております。東京のオリンピックのメーンコンセプトも「結ぶ」ということです。単にオリンピック招致ということではなく、本当に今、都市政策の中で大きなキーテーマであり、文化としても大きなテーマであると考えます。この「千の結び」というプロジェクトにより、今まで一緒に連携をしていかなかったものや、別々であったもの、あるいは他者であり、ほかのものだと思っていたものを全部つなぎ、結び、出会いの場を文化がつくれるのではないかと思うのです。

その出会いの場では、でき上がっていることを実施するのではなくて、出会いの中からいろいろなものが発見できる。オリンピックの理念でもある若い人たちにどんどん出会いの場を提供して、そこから発見し、この発見を通して社会参画を促す。これはまさしくクーベルタンが近代オリンピックを発案したときの大きな課題である若者の社会参画のなさ、無気力であり、先ほどからもお話があったように、彼らをどのように応援をしていくかである。それがクーベルタンの目指したことで、実は我々の成熟した都市の中において改めて重要な課題になっているのではないかと思います。

その「千の結び」のプロジェクトをある意味でパイロット事業として具現化する形として、東京アートポイント計画があります。２１年度から始まる事業ですけれども、様々な異なる分野を横断したり、例えば山本寛斎さんがやられていたみたいに、インドネシアと日本を結ぶとか、地方と何かを結ぶ、あるいは先端的なデザインと伝統的な工法、これは三宅さんがずっと前から重要だとおっしゃっていたことですけれども、そういうプロジェ

クトが「千の結び」あるいは東京アートポイント計画として、パイロット事業として進められます。

東京に幾つもの拠点をつくり、それが東京の文化の基幹施設とネットワーキングし、かつ、フェスティバル――フェスティバルは、単にお祭りという意味ではなくて、地域全体がある一つの文化のプラットフォームとなる。――とアートポイントがつながり、線となり、東京都の文化施設とさらに結び合ってもっとその線が太くなり、それが面になっていく。東京にはメトロポリタンミュージアムもカーネギーホールもありませんけれども、東京にはものすごいポテンシャルとエネルギーが渦巻いており、小粒できらりと光るものが山ほどあります。何かそれをネットワーク化して、もっともっと元気なまちになっていくような仕掛けを文化の政策の中から考えていければと考えています。

それを推進していく枠組みづくり、あるいは体制づくりというのも同時に考えていく必要があります。そのようなことを２期の検討課題の中に幾つか書いてございます。この東京芸術文化評議会自体も、発足以来お話があるように、これをどのように発展させるかです。イギリス型のアーツカウンシルというアームズ・レングス（arm's length）の距離を持つ独自の芸術文化政策かつ執行機関をある程度念頭に置いていますけれども、日本の場合の枠組みづくり、体制づくりも検討が必要です。先ほど申し上げたようなアートポイントやフェスティバルを支えていく基盤もつくっていかねばなりません。それを２期ではより具体的に検討すべきではないかということを、専門委員の方々と福原会長、事務局と検討をさせていただいたのがこの資料２になります。

以上、簡単ですけれども、１期の検討課題と文化発信プロジェクトを踏まえて、２期の検討課題の問題提起をさせていただきました。

〇福原会長

ただいまの文化を軸とした都市政策を具体的に表現するものとして、それからまた地域文化交流ですとか市民参画を推進するプロジェクトとして、評議会からの提案をもとに、今年度から新たに東京アートポイント計画が始動するわけでございます。これについて担当ディレクターから説明をいただきたいと存じます。

〇森課長

東京都歴史文化財団文化発信プロジェクト室「東京アートポイント計画」担当ディレクターの森司です。

これは、先ほどもありましたように、オリンピック立候補ファイルにも記載されました

“Tokyo Thousands Knots Project”をパイロット的に着手するものでございます。市民とアーティストが協働して、まちなかで展開するアートプロジェクトでございます。東京には個性豊かな地域がたくさんあります。この多様性を生かして、各地の特性を最大限に活用するアートプログラムをまちなかで行います。コンセプトは「アートで『人』『まち」『活動』を結ぶ」。地域に暮らす、あるいは地域にかかわりを持つ様々な人とまちなかのいろいろな場所と新しい価値や可能性を表現する活動がアートを介して結ばれる場所をアートポイントと呼びたいと思っております。

それでは、今年度実施を予定しております事業についてご紹介させていただきます。まず、アーティストが地域に入り、人々と交流するアートプログラム、アーティスト・イン・コミュニティです。例えば子どもが集う地域の児童館にアーティストが入り、一緒に創作することで、子どもがアートの楽しさを知り、創造力やコミュニケーション能力をはぐくみます。また同時に、アートや文化を担う若者を多く育成するプログラムとなります。

次に、防災アートプログラムです。だれもが当事者となり得る防災について、アートプログラムを通じて意識を高めます。市民がこの防災アートプログラムに積極的に参加することにより、地域コミュニティの絆が結び直されます。

最後に、川を使ったアートプログラムです。川は東京における最も重要な地域特性の一つです。生活から離れてしまった川を、アートを通じて再認識することで、防災や生活の中の一部としての有効性を見直します。

以上の事業を通じて、東京アートポイント計画では、東京の多様な魅力を地域、市民の参画により発信し、小さなアートポイントの継続的な活動とネットワークを通じ、東京の大きな文化パワーを生み出し、未来社会への投資を行い、次世代を育成することを目標とします。区、市町村や地域の市民団体などと連携しながら、このアートポイント計画を医療、環境、教育、産業、観光、まちづくりなどの様々な分野で展開し、都内にたくさんの結びをつくっていきます。

なお、東京アートポイント計画については資料５にまとめてございますので、お手元の資料をごらんいただければと思います。

〇福原会長

この計画についても、発信しながら、またそれを検討し、さらにつくりかえていくということになっていくと思います。

資料にも掲げられております２期目の課題につきましては、１期目と同様、大きなテー

マごとに専門委員による部会で検討していただいて、評議会からの意見を実現していくということにしたいと考えております。

これ以外にも、例えばラ・フォル・ジュルネみたいなものも鳥海さんのご苦労によって順調に推移しているものもありますが、一言、ラ・フォル・ジュルネの今期の状況をご説明願います。

○鳥海評議員

ラ・フォル・ジュルネは今年で５年やったわけですけれども、ご存じのように、今年は経済状況が非常に悪いです。どこもそうでしょうが、資金集めが非常に苦しかったです。さらに、今までは１週間ぐらいの期間開催しておりましたが、それは非常にアーティストの負担になるのです。特にクラシックですから、せいぜい４日ぐらいがマキシマムではないかということで、今年は締まった形でやろうということになりました。前夜祭に加え３日間で、今までの中で切符の売れ行きが一番よかったです。

半分ぐらいのステージは無料ですが、もう１つは、観衆が多様性を追求していますから、そういう意味でもリピーターが来るような形にもなってきました。また、東京の場合には、クラシックはやはり年配者のファンが多くて、若い人が少ないのですが、地方へ行くと若い人が結構多いのです。1,３００万人ぐらいいる東京都の大きさから見ると、まだまださらに発展する可能性があると思います。

先程の森さんのところもそうでしょうが、特に、この５年で考えましたが、継続することが大切なんです。そこに何があるかというと、昔の縁日とかお祭と同じで、みんな頭に摺り込んでいくわけで、そういう意味でぜひ続けていただきたい。

それと、この東京の大きさから見ると、今まさに今村さんが言われたように、点と点とを結んでいくという形だと思います。というのも、東京は、この周りの六本木から有楽町までを考えてみても、やはり拠点で物事ができあがっているわけです。だから、地域性というのが非常に重要ですし、地域の協力とともに行政の協力が必要ですから、そういう意味で、ぜひ六本木アートナイトを成功させていただきたい。それが渋谷や新宿にも行くようなことになれば、結構大きな輪ができてくると思うんです。

○福原会長

ラ・フォル・ジュルネのような初めから成功したプロジェクトでも継続が大事ということなので、今始めたものはすべて継続しながら発展させていく心構えでなければいけないと思います。

それから、よけいなことですけれども、国際フォーラムの人気が上がっているんです。この間、イベントを１つあそこでやろうといったら、日程がいっぱいでとれないとのことでした。非常におめでたいことだと考えています。

○鳥海評議員

今、東京国際フォーラムには年間２,０００万人以上の人が来ています。２,０００万人ですから、やはり非常に重要な拠点なんです。

これから大変ですが、あの周りに、ホテルが軒並み建ちつつあります。これから羽田の拡張ができますと、さらに海外からも脚光を浴びてくるのではないかと感じます。

○福原会長

今日は三宅さんから、文化の前にというか、文化とともに体力づくり、人間づくりの重要性をご提案もいただきました。これは１つ大きな課題として考えていかねばならないと思います。体力のない私がそういうことを言うのはちょっと変なんですけど。

○三宅評議員

オリンピックの後にパラリンピックがありますね。テレビで彼らの生活とか、彼らがどうしてそういうことをやっているのかという意思を見る機会があったんですが、生きるということに大変な誇りを持っています。だれの援助も受けず、奥さんが働いて、遠いところまで練習に行ったりとか。パラリンピックというのは、本当に感動させる。オリンピック以上に感動させると思っていまして、パラリンピックなら協力したいと思っているぐらいです。

「日本だから、できる。あたらしいオリンピック！」の「あたらしい」は言葉が新しくないんです。だから、「心のある」とか、「魂のある」、わからないけど、「優しい」、そういうものを表現されたらどうかな。「あたらしい」という言葉は本当に古臭いんですね。同時に、東京は人を育てていないですね。東京は人を育てない。

例えば新潟市は、ベジャールにいた金森穣さんという人と、彼が２９歳で日本に帰ってきてから、いろいろ話をして、６か月ごとに契約して、新潟市がダンサーたちの給料も払うことになった。通常、彼らはアルバイトをしながら練習して何とか舞台に立っていたんですが、ベジャールや、フォーサイスと同じように市が彼らの給料を持つ。そして、オペラハウスでやる。そういうことも少し考えていかないと。

そういう意味でも、演者たちが東京の顔をつくっていくわけですから、人材育成がまずは急務と思います。

○福原会長

もう１つ、私の個人的な思いなんですけど、すべての人じゃなくていいですから、例えば仕舞だとかお茶だとかの型を若い人につなげていくことは、とても重要なことではないかと思います。こんなことも考えていけたらいいと思っております。

○鳥海評議員

皆さんご存じないかと思いますので１つ申し上げておきたいのは、国際フォーラムは東京駅の宮城方面にあります。まだあの周辺にフォーラムの７割ぐらいの土地を東京都が持っているわけです。まず、豊通さんが入っているところと、隣のビックカメラ。それから交通会館、これで大体７割ぐらいなんです。これを一つ一つつぶしていくのではなくて、それこそ評議会で全体の方向性を審議していただいて決めていったら、あそこに緑の場所が大きくできますし、芸術関係のものを持ってくることも可能だと思うんです。自然に人が集まってくるようになっていますから、そういう意味では、先ほど山本さんが言われたように、ぜひ具体的にアクションを起こさないと何も進みません。いいと思ったらトライ・アンド・エラーでやっていくべきと思います。今は、バスの停まる場所になってしまっていますが、あれでは意味がないんです。ただ地下鉄で地下が深く掘られていますから、技術的になかなか難しいと思いますけど。

○福原会長

東京都を代表して猪瀬副知事がおられますので、頭の中へ入れておいて頂きたいと思います。お願いします。

○森評議員

イベントは継続が大事とお話があり、まさにそのとおりです。それだけではなく、今村さんから提案があったアートポイントなど、いろいろなプロジェクトをこれからやろうという計画があるようですが、それを一つ一つばらばらにやっていると効果が薄いので、例えばラ・フォル・ジュルネや芸術祭、アートナイトなどとつなげてアートポイントのイベントをやっていくのが効果的ではないかと思います。

○福原会長

その点も念頭に入れていきたいと思います。ただ今のところ、つなげていく以前に、一つ一つのことに精いっぱいというところもあります。

○森評議員

時期を合わせるだけでもよいと思います。

○福原会長

もう少しタイムスケジュールを考えてネットワークでつなげていくことも必要だと思います。その際はご協力をお願いします。

○今村参与

先ほど言い忘れたことがあります。資料３と４がございます。これは、福原さんが会長を務める企業メセナ協議会がつくられた「社会創造のための緊急提言『ニュー・コンパクト』」と「日本の芸術文化振興について、１０の提言」というものです。これが先ほど私が申し上げたような「千の結び」と共通する、芸術文化の活動が社会基盤をつくっていくんだということの提言になっています。我々の文化政策をつくっていく上で非常に有効な指針となっていますので、ぜひ皆さんに、これもお目通しをいただきたいと思います。

○猪瀬副知事

先ほど知事の話の中に千寿院の壁画の話がありましたが、国立新美術館の横の六本木トンネルのところに壁画がありますよね。ああいうところを、もっと増やせないのかと思うんです。

○森評議員

場所をいろいろつくられることもいいと思いますが、六本木のトンネルの壁画は、５年間ぐらい同じものがずっとあります。期間限定で若い人に描かせるなど考えられれば良いと思います。

○今村参与

まことに申しわけありません。言いわけになってしまいますが、１年で変える予定だったんです。1年ごとにいろいろなアーティストを選定してやっていこうという計画でした。

○森評議員

そのぐらいにしていかないといけないと思います。

○今村参与

ある意味、これも実施をする中でうまくいっていないケースです。知事もお話しされていましたが、いろいろな社会のインフラがあって、あのトンネルも実はかなり暗いトンネルだったんです。それを何とか芸術とか文化の力で、ちょっと雰囲気を変えようというのが、まだ森美術館がオープンする前だったんです。そこでアートをやろうというのが大きなテーマでした。おっしゃるように、どんどん機会提供という点を含め、文化は更新していかないといけませんから、それは重要なことだと思います。

○福原会長

　これで閉会させていただきますので、事務局にお返ししたいと思います。

○廣瀬文化振興部長

　それでは、次回の開催でございますが、秋ごろを予定しております。詳細につきましてはそれぞれ担当からご案内をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

　以上でございます。

午後５時３３分閉会